

定例研究フォーラム企業現場報告(1994年1月)

企業は学校の英語教育に何を望むか---東レ国際部の場合

小林 純(東レ株式会社)

東レは合成繊維、プラスチック、化成品、医薬品などのメーカーであり、その概要は次の通りである。(1993年3月現在)

(1)従業員数

東レ	10,382人(33%)
国内子会社	8,628人(28%)
海外子会社	12,349人(39%)
計	31,359人(100%)

(2)売上高(連結ベース)

国内(含子会社)	7,267億円(75%)
輸出・海外子会社	2,437億円(25%)
計	9,704億円(100%)

(3)海外投資残高 828億円

(4)主要投資先国 13カ国

繊維の海外事業は1960年代にタイで子会社を設立してから本格化し、以後1970年代にマレーシア、インドネシア、香港で事業を展開した。1980年代半ばからは、アメリカにおいてプラスチック事業、フランスで炭素繊維事業を開始し現在に至っている。

筆者は1970年代の半ばからファイナンスの面で東レの海外事業に携わったのを皮切りに、香港での5年間の勤務を含め約20年間東レの海外事業に関わり、国籍も異なり、職業も様々な外国人と英語でコミュニケーションを行って来た。本稿では、これらの経験を基に企業は中学校、高校、大学の英語教育に何を望んでいるかを述べてみたい。

東レにおいて英語によるコミュニケーションを行う業務は次の通りである。

業 務	相 手
(1)輸出・輸入	顧客、代理店等
(2)決算、資金業務	銀行、証券会社、会計事務所等
(3)投資家に対する情報提供	機関投資家
(4)諸契約	弁護士、会社等
(5)特許	弁護士、会社等
(6)技術情報収集	研究機関、会社等
(7)合弁会社経営に関する交渉	パートナー
(8)投資先所在国政府との交渉	政府職員
(9)子会社等との業務連絡	子会社現地スタッフ

以上のように、企業が海外事業を行う際には多種多様な国・職業の人と英語を主体としたコミュニケーションを行うことになる。現在筆者が籍を置く国際部は、東レの各事業本部のグローバルオペレーションを、全社的観点から総合的に調整し、また、企業買収や合併会社設立に際してのアドバイスや、海外合併会社の事業の基本方針に関するパートナーとの交渉も担当している。スタッフも営業、管理、技術分野で一定の経験を積んだ課長クラス以上の人で、英語コミュニケーション能力のある人を主体に構成されている。これらのスタッフを補佐する為、今まで英語能力のある学卒女子社員を採用してきたが、その英語コミュニケーション能力は一般的に次のとおりであり、現在の中学校、高校、大学の英語教育の問題点を示していると考えられる。

(1)国語力の不足

英語の文章を日本語に翻訳する際、こなれた日本語にできない。また、日本語を英語に翻訳する時にも日本語の文章の意味を十分に読み込んでいないと推察されるようなケースも散見された。最近の学校教育では日本語の作文能力の訓練が十分にされていないのではないかと推測される。

(2)時事英語に不慣れ

日常会話や随筆、文学作品などの文体、語彙はある程度の水準にあるが、会社で使われるようなビジネス英語、即ち時事英語には文体、語彙とも不慣れである。

(3)ライティングに不慣れ

最近、話す英語の重要性が認識され、日常会話の能力は相当なレベルに達している。その一方で逆に作文能力が劣っているケースもあり、スピーキング、ライティングとも水準を上げる英語教育はなかなか難しいと感じる。

(4)高校より大学の留学の方が有効

高校時点での留学は、どちらかと言うと異文化に出会ったことに感激して、それを吸収することに相当の精力が使われ、英語を手段として数学、歴史などの教科を勉強することには余り時間が使われていないのではないかと想像される。一方、大学時点での留学では勉強のレベルが高く、時間的にも高校時代に比べ余裕がないので、自ずから英語を手段として色々な勉強をすることになり、その結果ハイレベルの英語力がつくのではないか。会社にいる留学経験のある女子社員を見ていると、そのように感じる。

これからは昔と違って、企業では人員の面でますます余裕がなくなり、新入社員に対しても出来るだけ短期間で一定水準の仕事出来るようになって欲しいと要求するようになる。従って、学校の英語教育に対して次のようなことを望みたい。

(1)時事英語主体の教育

中学校の高学年になれば、生徒も知能水準が高くなり、政治、経済、社会の話題についても十分理解力があると考えられる。従って、中学校の高学年以降、時事英語の教材を順次増やしていき、大学では英文学を専門に勉強する学生を除いて教材の大部分を時事英語としてはどうか。これにより、社会に出ても文体、語彙の面で短期間で業務に適用出来る英語を身につけることが出来であろう。

(2)日本語による英米文化の理解

英語の背景にある英米の文化について理解することは、英語をより良く使いこなすことにつながると思うが、それを英語で勉強する必要はないと思う。外国語としての英語を勉強する際、文化は2次的な重要性しか持たないと考えられ、日本人であれば日本語で勉強するのが一番効率的ではないか。日本語でより多くの情報を得たほうが理解も深まると思う。

(3)体系的な語彙の教育

語学では、語彙の豊富さが重要な役割を果たすと考える。英語を母国語とする人は日常生活や勉強の場で時間をかけて語彙を増やすことが出来るが、日本人のように外国語として英語を勉強する際には、効率的に語彙を増やす必要がある。その意味で、体系的な語彙の教育が必要であろう。例えば、「非難する」という意味の英語には *accuse*, *blame*, *condemn*, *denounce* があるが、これらの単語がどのような状況で使われ、どのような非難の程度なのかを体系的に教える事などである。これによって、語彙の早く深い理解が得られるものと考ええる。